

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第8回【秋篠寺の萩―幻の写真―】

真夜中に目が覚めた。男三人で旅に出た。（今から五四年も前のことだ。）目的地は奈良京都方面。受験勉強の束縛から解放されユースホステルや野宿で寝泊りし、十日間ほどのアバウトな貧乏旅。二人の友人は早稲田、東大に落ち着く。私たちの年齢は19歳か20歳。旅の後半の目的地は秋篠寺。八月末の蟬時雨、門を抜けた途端その竹まいに馬鹿話が止んだ。本堂の右手に萩の薄紫が揺れる。堂内の闇に目が慣れ伎芸天がぬっと立つ。外の暑さもあつてしばし堂内で涼む。見学者はほとんどない。そのお顔の柔和な慈愛にいつのまにか包まれていることに気付く。豊かな時が流れた。

外に出ると或る人と出会った。付添カメラマンが数学雑誌の表紙に使うので写真を撮らせてほしいという。まばらに咲いた萩の前で誰か判らない先生とパシャパシャ。「戦後の日本は昔のものを捨て去ったが、君達のような若い学生が東洋的な情緒に関心を持つのは嬉しいことだ。」その後、理系の友人の調べで数学者の岡潔氏と判明。古典や仏像から学ぶことは尽きない。さて、岡先生、半世紀前の幻の写真は今いずこ。